

## 特集「ナショナリズムの表現」 : 特集「ナショナリズムの表現」について

著者	田中 優子
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	8
ページ	125-126
発行年	2010-08-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00022628">http://hdl.handle.net/10114/00022628</a>

## 特集「ナショナリズムの表現」について

田中優子

この特集は、2009年9月9日・10日に、法政大学ボアソナードタワーで開催されたワークショップ「世界における江戸学の現在——ナショナリズムの表現」における全発表を掲載したものである。このワークショップは法政大学競争的資金獲得助成金を使用し、国際日本学研究所の主催でおこなわれた。

競争的資金獲得助成金は、「世界における江戸学の現在——18世紀を中心に」という申請テーマに対して助成されたものであった。このプロジェクトは、

- ① 同時代に日本を訪れた外国人の記録にかんする研究
- ② 18世紀日本を世界的視野で捉えた研究の探索
- ③ 18世紀の日本人による自己認識および世界の中の日本像にかんする研究
- ④ 研究者データベースの作成
- ⑤ 江戸学研究ネットワークの構築

という5つのテーマを掲げていた。④についてはすでに多くのデータが蓄積されている。⑤については、④を基礎にプロジェクトを実践しながらまとめてゆく見込みができていた。そこで、①②③の課題を、具体的には③に絞り込むことで実行することとし、その助走として、このワークショップが開催された。

このワークショップの目的は、近世日本とりわけ18世紀において、おもに大衆文化の次元で、対外意識がどのように表象され、その結果として、どのような「日本」意識が胚胎されたかを探るものである。

この時期、読本（よみほん）、洒落本、黄表紙、俳諧、狂歌、狂詩、絵画、浮世絵などが中国・欧州から多大な影響を受け、その中で新しい「日本的」なる表現や、複数文化圏を混合した独特な表現が作り出された。また、「日本」を強調する表現も現れ、一方で国学が発生・発展した。

実際に存在するテキストや絵画や図版を使い、それがどのような日本意識であったかを考えると同時に、そのような作品をめぐる近現代の研究者と研究史の中に内在してきたナショナリズムをも、対象化する。

ワークショップは以上の目的でおこなわれ、この結果を受けてその年の11月に科学研究費「近世日本の大衆文化における日本意識の表現——17・18世紀を中心に——」の申請がおこなわれた。2010年4月にこれが採択され、本ワークショップの研究課題を継続して深化させるべく、新たに出発している。

なお国際日本学研究所は、このテーマを他の時代と東アジア全体に拡大した「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討」というプロジェクトをかけた。これは、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として採択されている。